

ナクシュバンディー研究集会 (TABLE RONDE SUR LES NAQSHBANDIS)

濱 田 正 美

近年におけるスーフィズム研究の進展にはまことに目覚ましいものがある。故アンリ・コルバンやわが井筒俊彦氏に代表される哲学的・教理的研究の新しい地平の開拓はいわずもがな、スーフィズムの歴史社会的表現としての教団 (ṭuruq) を対象とする研究の発展もまた著しい。中世以降の、とりわけイスラム世界の周辺部に対する研究者の関心の深化が、スーフィー教団の重要性を改めて認識させる契機になっていると考えられる。1982年5月、フランス社会科学高等研究院 (Ecoles des Hautes Etudes en Sciences Sociales) が、“Les ordres mystiques (tariqat) dans l’Islam, cheminement et situation actuelle (イスラムにおける神秘主義教団、発展と現状)” というテーマで研究集会を開催したのは、この問題に関する研究の「発展と現状」を適確に反映したものであった。今回の研究集会は、いわば総論としての前回のあとを受けて、各論としてナクシュバンディー教団を対象とするものであり、主催者の側からは、あらかじめ以下の3つの重要テーマが提示されていた。すなわち、教団の、1) 地理的・歴史的分布、2) 教理的側面、3) 社会・経済・政治的側面、であり、とりわけ第3点を中心にしたということであった。

今回の研究集会を主催したのは、EHESS 始め、Centre National de la Recherche Scientifique (国立科学研究センター)、Fondation Nationale des Sciences Politiques (国立政治学機構)、Centre d’Etudes et Recherches Internationales (国際問題研究センター) の4機関であるが、実際の運営にはそれぞれの機関に所属する M. Gaborieau 氏 (CNRS) 及び同氏夫人、A. Popovic 氏 (CNRS/EHESS)、V. Graff 女史 (ENSP) 等が当たられた。

研究集会は1985年5月2—4日の3日間、パリ郊外セーヴルの Centre International d’Etudes Pédagogiques (国際教育センター) で開催された。この機関は、諸外国のフランス語教師に研修の機会を提供するものようであるが、かつての女子高等師範学校

の建物を使用している。研究集会の参加者は、シモーヌ・ヴェイユやボーヴォワールのものであったかも知れぬ宿舎の部屋に泊り、彼女たちの教室で研究発表をしたり、聞いたりすることになった。

研究集会は、主催の機関を代表する Louis Bazin 教授の挨拶で始められた。以後 3 日に及ぶ研究集会での発表者と題目は以下の通りである。(迂闊なことに、発表題目の訂正等をメモしたプログラムを紛失してしまった。以下のものは研究集会寸前のプログラムであり、実際とは 1～2 異なる点がある。御海容を願う。)

JEUDI 2 MAI

- 9h. 30–10 h. – *SEANCE D'OUVERTURE* par Louis BAZIN
(Directeur de l'Institut d'Etudes Turques, Paris)
- 10h. –13h. 30 – *Ière SEANCE : HISTOIRE ET DOCTRINE*
(Président : Y. FRIEDMANN, Univ. de Jérusalem)
- Jo Ann GROSS (Univ. of New York) :
“An interpretative approach to understanding the role and perceptions of a Timurid Shaykh, Khwaja ‘Ubaydullah Ahrar”.
- A. G. Ravan FARHADI (Univ. de Paris III) :
“Observations sur les ouvrages en persan et en tadjik concernant les Naqshbandis”.
- Johan TER HAAR (Univ. de Leiden) :
“The Naqshbandi tradition in the eyes of Ahmad Sirhindî”.
- Michel CHODKIEWICZ (EHESS, Paris) :
“Quelques aspects des techniques spirituelles dans la Naqshbandiyya”.
- Stéphane RUSPOLI (Paris) :
“Quelques aspects spirituels de la Voie des Naqshbandis”.
- 14h. 30–18 h. – *IIème SEANCE : NAQSHBANDIS ET POUVOIR POLITIQUE*
(Président : G. VEINSTEIN, EHESS)
- Alexandre BENNIGSEN (EHESS, Paris) :
“Les Naqshbandis en URSS depuis la deuxième guerre mondiale”.
- Chantal LEMERCIER-QUELQUEJAY (EHESS, Paris) :
“La Naqshbandiyya au Caucase et ses rapports avec la Qadiriyya”.

- Olivier ROY (INALCO, Paris) :
 “Les Naqshbandis dans la Résistance Afghane”.
- Martin VAN BRUINESSEN (KITLV, Utrecht) :
 “The first influential Naqshbandi Shaikhs in Kurdistan :
 the Urmawi branch (17th century)”.
- Halkawt HAKIM (INALCO, Paris) :
 Maulana Khalid et les puissances politiques”.
- Joyce de WANGEN BLAU (INALCO, Paris) :
 “Le rôle des Naqshbandis dans l’histoire moderne des
 Kurdes”.

18h. 15 – RECEPTION

VENDREDI 3 MAI

9h. –13h. 30 – *IIIème SEANCE : LES NAQSHBANDIS EN ASIE CEN-
 TRALE EN INDE ET EN INDONESIE*
 (Président : Ch. J. ADAMS, McGill University)

- Hamid ALGAR (Berkeley University) :
 “Aspects politiques de l’histoire de la Naqshbandiyya”.
- S. A. A. RIZVI (Univ. of Canberra) :
 “The Indian Naqshbandiyya leadership (a socio-political
 challenge)”.
- Yohanan FRIEDMANN (Univ. of Jerusalem) :
 “The Naqshbandis and Aurangzeb : a reconsideration”.
- Farhan Ahmad NIZAMI (St. Cross College, Oxford) :
 “Shah Ghulam Ali : A Naqshbandi saint of British North
 India”.
- Simon DIGBY (Oxford University) :
 “Naqshbandis in the Deccan in the late 17th century and
 early 18th century : Baba Palangposh, Baba Musafir and
 their adherents”.
- Fateh Muhammad MALIK (Univ. de Heidelberg) :
 “Naqshbandia and the Ideology of Muslim Nationalism in
 India”.
- Werner KRAUS (Univ. de Passau) :
 “The Naqshbandiyya Brotherhood in Indonesia”.
- 14h. 30–16h. – *IVème SEANCE : LES NAQSHBANDIS EN CHINE*
 (Président : D. LOMBARD, EHES)
- Françoise AUBIN (CNRS/CERI, Paris) :

“En Islam chinois : quels Naqshbandis?”.

Raphael ISRAELI (Harvard Univ.) :

“The Naqshbandiyya and factionalism in Chinese Islam”.

Masami HAMADA (Hosei Univ., Tokyo) :

“De l'autorité religieuse au pouvoir politique : la révolte des Tungan-Uyghur et Khoja Râshidîn”.

16th. 30–18h. 30– *Vème SEANCE : LES NAQSHBANDIS AU PROCHE ORIENT ET AU SOUDAN*

(Président : J. -L. TRIAUD, Univ. de Paris VI)

Fred DE JONG (Université d'Utrecht) :

“Les confréries Naqshbandies en Egypte et en Syrie : passé et présent”.

Daphne HABIBIS (London Univ.) :

“Mahdism in a contemporary Naqshbandi order in Lebanon”.

Nicole GRANDIN-BLANC (EHESS, Paris) :

“A Propos du *sanad* Naqshbandi dans la tariqa al-Mirghaniyya (al-Khatmiyya) du Soudan oriental”.

SAMEDI 4 MAI

9h. –13h. 30 – *VIème SEANCE : LES NAQSHBANDIS EN TURQUIE ET AU PROCHE-ORIENT*

(Président : D. TANASKOVIC, Université de Belgrade)

Butrus Abu Manneh (Haïfa Univ.) :

“Further Notes on Shaikh Khalid and the Khalidiya”.

Altan GÖKALP (CNRS, Paris) :

“L'émigration turque et le Naqshbandisme”.

Robert W. OLSON (Univ. of Kentucky) :

“The international consequence of the Shaykh Saïd Rebellion”.

Şerif MARDIN (EHESS, Paris) :

“Nurculuk : une variante populiste du “mudjeddisme” naqshbandi”.

Paul DUMONT (CNRS, Paris) :

“En marge du Naqshbandisme : le mouvement nurcu en Turquie”.

Irène MELIKOFF (Univ. de Strasbourg) :

“Bektachis et Naqshbandis après 1826”.

Klaus KREISER (Univ. de Bamberg) :

“Les couvents des Naqshbandis à Istanbul”.

14h. 30–16 h. – VIIème SEANCE : LES NAQSHBANDIS DANS LES BALKANS

(Président : K. KREISER, Univ. de Bamberg)

Alexandre POPOVIC (CNRS/EHESS, Paris) :

“Quelques remarques sur les Naqshbandis dans le sud-est européen (période post-ottomane)”.

Džemal ĆEHAJIĆ (Institut Oriental, Sarajevo) :

“Socio-political aspects of Naqshbandis in Bosnia, Herzegovina and Yugoslavia generally”.

Fehim NAMETAK (Institut Oriental, Sarajevo) :

“L’ordre des Naqshbandis dans la littérature de Bosnie”.

Jasna ŠAMIĆ (Univ. de Sarajevo) :

“Les Naqshbandis de Bosnie (surtout ceux de Visoko) et leurs relations avec d’autres ordres soufis”.

Darko TANASKOVIĆ (Univ. de Belgrade) :

“La situation actuelle de l’ordre des Naqshbandis à Kosovo et en Macédoine”.

16 h. – Discussion générale animée par Ş. MARDIN et J. L. TRIAUD.

時間的には Khwaja Aḥrār から現在のアフガン問題や西ドイツのトルコ人労働者間の原理主義的運動に至るまでの、又地理的にはインドネシアからスーダン、ボスニアに迄広がる、かくも様々な研究を重ね合わせることで、何がしか統一的なナクシュバンディー教団のイメージが結ばれるとは、もとより期待し難い。事実、筆者はその多様性をこそ強く印象づけられた。然り乍ら、複数の研究に共通する問題が存在したことも事実である。そのひとつは、やや一般化して言えば、現に教団に所属する人々の意識と外からの観察者の認識の間の齟齬の問題であり、具体的には、とりわけシーア派からの影響を巡る論議の中で明かとなった。例えば、J. Šamić 女史は、H. Algar 氏に調査されたボスニアのナクシュバンディーが、その後発表された Algar 氏の論文 *Some Notes on the Naqshbandī ṭarīqat in Bosnia, Die Welt des Islams, XIII* を読み、氏がシーア派の影響を云々したことに対し大いに怒っていると伝えた。又 F. Aubin 女史と R. Israeli 氏の間でも、中国西北部の教団を果して真正のナクシュバンディーやとみなせるか否かの論戦があった。(その際 Israeli 氏は *degeneration to the Shi'ism* という言葉を口にしてしまい、自身シーアである Rizvi 氏の激怒を買うという一幕もあった。Rizvi 氏はまず英語

で、degeneration とは何事か。抑イスラムに関する国際学会でアラブ語を公用語にせぬとは何事かと叫び、ついで司会者の制止もものは、優に30分はアラブ語で演説をぶった。)確かに、我々外部からの観察者には、ナクシュバンディーヤに限らず、スーフィー教団とシーア派共通の要素が目につき易い。しかし教団に属する人々は、自らがスンニーであることを毫も疑ってはおらず、従ってシーアの影響云々の指摘は、彼らには侮辱と受け取られかねない。ましてその影響受容を Israeli 氏の如く、degeneration などと表現すれば今度はシーア派からの怒りをも買うことになる。外部からの観察者はその認識の正当性を内部の人々に如何にして主張し得るか。抑その正当性を主張する根拠を持ち得るのか。近年以来「東洋学」が問われている問題にここでも直面せざるを得ないと感じた。内部の意識を外部からどう認識するかという問題は、Ş. Mardin, P. Dumont 両氏の応酬にも表れた。両氏とも Nurcu 運動に関する発表を行ったが、Mardin 氏が、地動説への理解を例に引き、創始者 Nursi (1864~1960) にある程度の進歩性を認めようとするが如くであったのに対し、その保守性を主張する Dumont 氏は、地動説を知っていることは、20世紀においては何ら開明性の証明にならないと一蹴した。

数多くの研究のうち、1826年のベクタシー禁絶以後の、ベクタシーとナクシュバンディー間の興味深い接触について述べた I. Mélikoff 女史、デカンにおける、Shirhindr の系統とは全く無関係なシャイフの存在を指摘した S. Digby 氏、又 Khalidiyya に関する Abu Manneh 氏、イスタンブルのテッケの様相を具体的に紹介した K. Kreiser 氏等の発表を、筆者は特に興味深く聞いた。主催の意図とはやや異り、3つの主要テーマのうち、社会経済的側面を本格的に扱った研究は少数派にとどまったが、プログラムを一瞥して明らかなように、あらゆる地域のナクシュバンディーが研究の対象になっていることは、新鮮な驚きであった。先に指摘した微妙な問題も含め、未だナクシュバンディーの全体像を云々出来る段階ではない。むしろ現在は A. Popovic 氏が述べた如く、「資料に対する価値判断を急ぐことなく、可能な限りあらゆる具体的情報を収集すべき時」であるというのが、多くの参加者の印象ではなかったかと思う。

なお、前回の研究集会の発表は、1984年中に論文集として刊行される予定であったが、未だ筆者の手許には届いていない。今回の発表も出来る限り速かに刊行される予定である。又、次回の研究集会は、I. Mélikoff 女史が主催して、来年(1986)6月、ストラスブールで、ベクタシーをテーマにして開催されることになった。

最後に、今回の研究集会を組織する原動力となった研究グループの活動について一言しておきたい。それは、A. Popovic 氏を代表とする CNRS の研究グループで、「辺境

イスラム世界に関心を持つ、CNRS, EHESS, INALCO (かつての東洋語学校), パリ第7, 第10大学に所属する研究者・教育者により構成されており, グループの名称を *La transmission du savoir dans le monde musulman périphérique* と言う。Popovic 氏以外のメンバーには, 近年モンゴル研究から中国ムスリムに研究の重点を移された F. Aubin 女史, 中国及び東南アジアのイスラムの専門家である D. Lombard 氏, それにソ連領中央アジアの専門家として名高い A. Bennigsen 氏と Ch. Lemerrier-Quellejay 女史, アフリカ研究の J. -L. Triaud 氏等がある。この研究グループはタイプ印刷乍ら, *lettre d'information* を刊行しており (1984年3月, 11月, 1985年4月), 比較的短篇の論文や学界動向を掲載している。更にこのグループは *Le dictionnaire biographique des savants et grandes figures du monde musulman périphérique* を編纂するプロジェクトを持っている, これは, 西アフリカ, 東アフリカ, 中央アジアとコーカサス, 南アジア, 東南アジア, 極東, パルカンの7つの地域について, 各々の地域で教育運動や民族主義的もしくは独立運動が発生した時点から現在に至る迄の, 重要人物の伝記辞典を作ろうとするもので, イスラム百科辞典の欠を補い得るものになると聞いた。筆者もプロジェクトへの協力を求められているが, わが国にはいわゆる「辺境イスラム」に関心を持つ研究者が少なくない。彼等の情報交換と交流によって, この分野の研究が更に進展することを望みつつ, 蕪雑な報告を終えさせていただく。 (1985年11月記)